

東北再生に向けて何をなすべきか

「復活と創造 東北の地域力」緊急シンポジウム開催

東日本大震災からの復興と再生を考えるシンポジウムが六月十八日、泉キャンパス礼拝堂で開かれ、市民や学生など約千二百人が参加した。主催は本学と河北新報社。五月の連携調印を受けた初の事業開催となった。

シンポジウムに先立って、経済評論家・内橋克人氏による基調講演が行われた。内橋氏は、「震災から百日経っても、被災地への国の支援が十分でないことに怒りを覚える」と語り、東北は声を上げてこれからの統治の在り方を問い直し、これまでにない新たな社会づくりの先頭に立ってほしい。新生東北が日本を変えると信じている」と訴えた。

シンポジウムでは内橋氏、一力雅彦河北新報社社長、星宮本学大学長の三人が「東北再生のために私たちがなすべきこと」をテーマに意見交換した。

内橋氏は「東北の匠（たくみ）たちの現場での議論と技術が日本における世界的サプライを支えてきた。効率優先の名の下にその多くが姿を消したが気風はまだ残っている」と指摘。その上で「匠のモノづくりの技能や理念を生かした、弱き人の利益を先に考えていく“人間復興”の新たな基幹産業のモデルが東北から生まれると信じている」と説いた。

一力社長は「いま被災地は一刻を争う救済が求められて

いる。内橋氏から被災地だからこそもっと声を上げよ、という強いメッセージをいただいた」と応え、「東北の製造業が被災したことで海外への部品の供給が途絶えるなど、震災によってその存在感を大きく示した。そうした東北の力を再確認して広く発信するなど、東北の制度設計をしながら再生のビジョンづくりを提言していきたい。提言と現場のギャップを縮めるのがメディアの役割」と語った。

星宮学長は「IT 技術を社会的にどう生かすかの議論が十分ではない。国の基本の方針がないことも問題」と指摘。

「全国十六万人の本学同窓生のネットワーク構築を考えていた矢先に震災が発生し、情報ネットワーク強化の必要性を痛感した」としながら、「多くの同窓生が復興の力となっている。被災地の同窓生とも連携して支援していきたい」と語った。また、本学の多くの学生が震災直後から被災地に入りボランティア活動に携わっていることを紹介し、「その貴重な経験を東北再生の力として生かしてほしい」と呼びかけた。